

共立女子大学文芸学部報

共立女子大学文芸学部報
第138号
発行日 2021年7月14日
編集・発行 共立女子大学
文芸学部
〒101-8437
東京都千代田区
一ツ橋2-2-1
発行責任者 深津謙一郎
創刊 1968年12月
題字 遠藤慎吾
第二代文芸学部長

学部報に関するご意見・感想を以下のメールアドレスまでお寄せください。
gakubuh@kyoritsu-wu.ac.jp
学部報は共立女子大学公式HPの「文芸学部」のコーナーでもお読みいただけます。
<https://www.kyoritsu-wu.ac.jp/>

第138号 主目次

第1面	トップエッセイ 美の旅 大学随想
第2面	特集 「卒論物語」
第3面	研究ノート 心象点描
第4面	各セクションから

〈今号の一言〉
「考え抜いた末、壁に突き当たったらそれ以上悩まないで、別の選択肢を考えたり、それを探る努力をしたりすること。」(第3面・大友)

大学随想

大学院生の頃、漱石山房の近くに下宿していました。その頃は夏目漱石にも猫にも興味ありませんでした。それが最近、漱石や犬を身近に感じるようになってきました。猫じゃななくて、漱石先生ごめんなさい。

きっかけはスイフト「ガリヴァー旅行記」です。童話だと思っていたら大人向けの諷刺小説でした。同じことを百年前に漱石も言っています。その時から漱石は同志になりました。オメデタイ勘違いですが、勉強の励みにもなります。

ガリヴァーは小人国や巨人国だけでなく、空飛ぶ鳥ラプテータも探検します。これがジブリ「天空の城ラピュタ」の元ネタです。馬の国では人間はヤフーと呼ばれ、邪悪で汚らしい生物です。もしかしたらYahooの社長は人間嫌いなのかも知れません。

架空の国ばかりでなく、実在する国も出てきます。それが江戸時代の日本です。ガリヴァーは江戸で將軍に拝謁し、踏絵の免除を願います。將軍は「踏絵を嫌がるオランダ人は珍しい」と大笑いしますが、ここは妙にリアルです。当時イギリスとオランダは争っていたので、オランダの悪口はイギリスの読者に受けたのです。「オランダ人は信仰を犠牲にして金儲けしている」というわけです。

スイフトは元オランダ駐在の外交官の秘書だったので、オランダや日本の情報入手は容易でした。この情報には日本の古典文学も含まれるでしょう。と言うのは、小人国への探検話は世界中にありますが、小人国と馬の国が両方出てくるのは、日本の御伽草子「御曹子島渡り」と「ガリヴァー旅行記」くらいなのです。スイフトは御伽草子にインスパイアされて、あの名作を執筆したのかも知れません。この推測(妄想)を漱石同志はどう思うかな。「危険な冒険はやめておけ」と言われるかなあ。(堀 新・教授・文芸教養)

旅と芝居とロンドンと

多田久恵

初めてのパスポート

「一緒にロンドンに行かない？」と誘ってくれたのは、造形芸術コース出身でロンドンで研究生活を過ごした友人である。今もそうだと思うが、文芸学部の助手はコースをまたいで仲が良く、それは助手を辞めた後も続いていて、お互いに刺激を与える存在である。私が英米演劇を読み続けているのに、ロンドンにもニューヨークにも行ったことがないのはいかなるものか、と心配してくれたのであろう。初めてパスポートを手にしたのは一九九一年、四十八歳の時である。

ロンドンでの滞在先はハムステッド。友人がかつて借りていた部屋に二人で泊まらせてもらう。家主のロドリゲス氏はインド人。家作を何軒も所有しているとか。夕食に招かれたのは嬉しかったが、だんだん苦痛になってきた。

会話が種が尽きてしまうのである。英語は記憶と反復練習によってある程度身につくものであるが、中身は別物で、頭と心が試されているように居心地が悪かった。昼は美術館、夜は劇場に足を

運んでいたある日、「Are you enjoying London?」と声をかけられた。観光客にはこう話しかければいいのね、と振り向くと、引退間のロッキーに似ている男が立っている。劇場まで英会話の練習をして別れる。芝居はハロルド・ピント作『帰郷』で演出はピーター・ホール。思わぬせりふなせりふや人間関係を反芻しながら地下鉄の駅に向かっていると、雑誌を丸めたようなもので肩をたたかれた。「芝居はどうだった？」と、その一年前にテムズ川南岸ザークの地に建てられた「シェイクスピアのグローブ座」を見ることができた。場所こそ三〇メートルほど離れてしまったが、茅葺きの屋根、張り出し舞台、屋根のない平土間、舞台を囲む三層の客席など、出来る限りシェイクスピア時代の「グローブ座」を復元したそうである。演目は、ベン・ジョンソン作『癖者ぞろい』であったか。観客は笑いに笑っていて台詞がよく聞き取れない。笑いの渦が私の耳だけ避けて通っていくのがはなはだ不愉快で、休憩の時そとと抜け出す。空にはヘリコプターが旋回し、風は昔の風ではなかったが、今踏みしめているこの路は、シェイクスピアもジョンソンも歩いた

再びロンドンへ

それから三、四年おきに三度ロンドンを訪れ、ナショナル・シアターなどに通いつめた。難解な討論劇は比較的理解できたのに、普通の家庭劇は取りこぼしが多かったのではないかと不安になったのはこの頃である。アガサ・クリ

ステイ作『ねずみとり』はその時点で四十年以上ロングランを続けていた推理劇であるが、見終わっても犯人が誰だか分からない。二回目に同行した若い友人に尋ねると、すぐ返事が返ってきた。毎晩犯人を変えているらしい、との情報もあったが、一回目に当てられなかったから確認の仕様がな

い。惨めな気持ちで劇場を後にする。一九九八年の旅の主な目的は、その一年前にテムズ川南岸ザークの地に建てられた「シェイクスピアのグローブ座」を見ることができた。場所こそ三〇メートルほど離れてしまったが、茅葺きの屋根、張り出し舞台、屋根のない平土間、舞台を囲む三層の客席など、出来る限りシェイクスピア時代の「グローブ座」を復元したそうである。演目は、ベン・ジョンソン作『癖者ぞろい』であったか。観客は笑いに笑っていて台詞がよく聞き取れない。笑いの渦が私の耳だけ避けて通っていくのがはなはだ不愉快で、休憩の時そとと抜け出す。空にはヘリコプターが旋回し、風は昔の風ではなかったが、今踏みしめているこの路は、シェイクスピアもジョンソンも歩いた

小さな同窓会

文芸学部が創設されてから五十年たった二〇〇三年、同窓会「文芸OGネットワーク」が生まれ、劇芸術研究室所蔵の演劇資料整理を手伝うことになった。卒業生十二、三名が毎週三号館大学院棟五階に集まる。四歳から宝塚を見始めたという先輩、七十歳近くになってから大学院に入学した先輩、地方にでかけその土地の土地を使って陶芸を楽しむ会に入っていて、時々姿を消す先輩、生まれる前の出来事をまるで見てきたように見事に解説してくれる不思議な先輩……。「おしゃべりは文化よ」とは恩師の口癖であったが、資料整理の後の時間を、私は「文芸サロン」と名付けている。使用言語が日本語であることが何よりも嬉しい。

共立祭に演劇公演のポスターやプログラムを展示し始め「ハムレット展」の準備をしていたある年のこと。「学生の時に「グローブ座」の模型を作ったけれど、あれはまだあるのかしら？」とオベラ好きの先輩が思い出した。英文学コースの学生有志が造形芸術コースの故友部直教授の指導のもとに「グローブ座」の模型を制作したというのである。

一九六二年秋の共立祭、東京オリンピック開催の二年前のことである。「グローブ座」との再会

「このベンチには割り箸を使ってみようか」と提案する友部先生のそばで制作に携わったのは、「木工」の授業で腕を見込まれた卒業



中央に見えるのが1962年制作の「グローブ座」の模型
共立祭(2012年)の展示より 撮影：村上智子(1963年卒・英文学)

生。共立高校の英語の授業を終え、と母校に駆けつけ作業に励んだそうである。二人を囲んで学生達が、あるものは紙を切り絵の具を書いている。その光景は想像するだけで楽しいし、少しばかり羨ましい。

エリザベス朝時代の演劇に戻ろうという運動は十九世紀末より活発となり、J・C・アダムズによるグローブ座復元理論をもとにアーウィン・スマイスが二十四分の一の模型を作る。その著「シェイクスピアのグローブ座」の巻末に十五葉の設計図を載せたのは一九五六年のこと。一九六〇年ごろロンドンに旅した方から「そういえば「グローブ座」の模型が売店で売られていたような記憶がある」と伺ったことがある。学生たちはその模型を見たのか、あるいは

は話を聞いて、友部先生に指導をお願いしたのであろうか。それとも友部先生ご自身の発案で、学生たちに声をかけられたのであろうか？ 学生有志のリーダーも友部先生も亡くなられた今となっては、真相を確かめるすべがない。全国に文学部は数多くあろうが、英文学コースの学生がシェイクスピア時代の「グローブ座」の模型を仕上げた例は、確証はないけれど、共立女子大学文芸学部だけではないかと、私は秘かに誇りに思っている。

ここ一年半ほど、毎日のように英米の映画を見ているせい、か、英語脳が活性化されているような気がする。コロナのおかげとは言いたくないが、今なら「ねずみとり」の犯人をびたりと当てられそうな気がするのだが……。(一九七〇年大学院修了・演劇学)



伊藤和子作「イギリスの朝」(2019年、8号)

美の旅

加藤和代

この絵は、伊藤さんがモチーフとして描き続けているものを、少し開けられた窓のそばに置いて、朝の静寂を一瞬の光と影の中に捉えた素敵な作品です。

伊藤さんは、造形芸術コースを一九七七年に卒業後、米国ペンシルベニア美術学校を卒業。帰国後、油彩とテンペラ併用による「古典絵画技法」を修得し、現在はその指導もなさっています。

(一九六〇年卒・日本文学)

特集

卒論物語

卒業論文は、大学での勉学の集大成です。集大成とは、研究テーマを見つけることから、調査し、まとめるところまで、すべて自分一人で行い遂げることを意味します。もちろん、それは簡単ではありませんが、だからこそ達成感もひとしおで、一生の宝にもなります。今号の特集は、各年代の卒業生に、卒業論文にどのように取り組んだか、その物語を語ってもらいます。

卒論に挟んだ思い出

久家 彩

卒業論文。人生の中であれだけの文字数と戦うことがあったのだろうか。私の歴史に刻まれた、誇らしい記録である。

さて、集大成である卒業論文のテーマは何にしようか。当時、私の頭には宝塚歌劇しか浮かんでこなかった。「ああ宝塚。私の永遠の夢の園。」これ以外にあり得ない。

しかし、当時は宝塚歌劇を卒業論のテーマに取り上げた例が少ないうことで、忠臣蔵VS宝塚の大石内蔵助というテーマを選択し、無

人の縁に囲まれた最後の1年を振り返って

石井 小百合

私は劇芸術コース所属でしたが、フランス語フランス文学コースの先生が卒業論文の主旨でした。さらに学園祭を訪れた時に演劇ポスターを出展していたOGネットワークの方から声を掛けられ、そこからOGの先輩方と知り合いました。いつも資料の整理をしている演劇資料室から『サロメ』のオペラ版の資料を頂き、当時直近で上演された舞台版パンフレットも貸していただきました。演劇資料室にはその後何度も足を運び、他の資料を見せて頂くこともありました。

今でもOGネットワークの方とは手紙のやりとりをしながら、卒業論文の時期だけでなく卒業後の人生でも思いがけない良い出会いとなりました。最後は自分一人の力で論文を書き上げましたが、一人だけでは

事先生方の許可を頂いたのだ。そして、丁度テーマが決まり、書き始めた頃に忘れられない出会いがあった。宝塚歌劇版『忠臣蔵』作・演出の柴田侑宏先生にお会いすることが出来たのだ。宝塚の演出家は私にとってタカラジェンヌよりも憧れていた存在である。まして自分が卒論に選んだ作品の演出家に会えるなど、感無量であった。

緊張する声で「忠臣蔵で卒業論文を書かせていただきます」とお伝えすると、気さくに上演時のエピソードをお話くださったのを覚えている。あの時の優しい柴田先生のお顔は今でも忘れない。「卒業論文が私と柴田先生を引き合わせてくれたのだ」などと勝

映画の可能性を追究する

秋元 藍

子供相手の活動写真としてスタートした映画が、まだ芸術としての市民権を得ていなかった時代。映画を文学と比較し、「映画の可能性を追究する」というのが、私の卒業論文のテーマだった。

具体例として、フランスの映画監督マルセル・カルネを取り上げた。カルネはフランスの自然主義作家エミール・ゾラの処女作『テレーズ・ラカン』を、「嘆きのテレーズ」としてスタートというタイトルで映画化した。リアリズム一辺倒のゾラの原作から、物語の枠だけを借り、その枠の中をカルネの絵筆で塗りつぶした。



テレーズを演じるシモーヌ・シニョレ

あれから六十年。ずいぶん遠くまで歩いて来たと思っていたが、振り返ると、じつはほんの少しばかり移動したにすぎないような気がする。十八歳で九州から上京。言葉の訛に苦しみ、コンプレックスのかたまりだった私に、クラスメイトは優しくしてくれた。コロナ禍がおさまらず、また集まる機会があれば、感謝の気持ちを伝えたいと思っている。(一九五八年卒・芸術学専攻)

すくろ賞

最優秀卒業論文・卒業制作タイトル一覧(抄)

- 【日本文学コース】「論文」郷土かるたのちから―土地・言葉・音―(二〇一三) / 海幸・山幸神話の変容―呪力の機能の側面から―(二〇一七)
【英文学コース】「論文」John Keats 研究―Sonnetsを中心に―(一九八二) / Andy Warhol's Style-Fashion and His Time―(二〇〇〇) / ローラの素顔―『大草原の小さな家』シリーズ研究―(二〇一〇)
【仏文学コース】「論文」カミュにおけるBalancementの美学(一九七九) / La valeur du "tu" et du "vous" dans la langue française (フランス語における"tu"と"vous"のもつ意味)(一九九六)
【劇芸術コース】「論文」チェーホフの「桜の園」について(一九七八) / ノラ論(二〇〇〇) / 『天衣紛上野初花』研究―黙阿弥世話物と講談比較―(二〇〇三) / 『木更津キャッツアイ』研究―キャッツたちは何にばいばいしたのか―(二〇〇八) / スクリン・トーンマンガの個性を引き出すツール―(二〇〇六)
【制作】(シナリオ)Lost Parents(一九九八) / 肌に棲む(二〇一一) / (戯曲)くらげ部屋(二幕六場)(二〇一四)
【造形芸術コース】「論文」ショット芸術の革新性とその起源(二〇一二) / ポロミーニの教会建築における空間について(二〇一四) / 酒井抱一筆『十二ヶ月花鳥図』における季節観(二〇〇七) / 地獄草紙―東京国立博物館本第四段の再解釈を中心―(二〇一九)
【制作】(絵画)二人の裸婦・自画像(二〇〇一) / 裸婦・自画像(二〇〇五) / 牛骨のある風景I(二〇一三) / 桜(二〇一八)
【文芸メディアコース】「論文」メディアの進歩と読書の変化―ケータイ小説を考える―(二〇〇九) / 現代のファーストメディア考―テレビとインターネットの流行創出について―(二〇一五) / 深夜番組から考えるテレビの未来(二〇二〇)



手に感謝し、俄然やる気になって原稿へ立ち向かった。が、思いのほか文字数に苦戦してメッキリギリギリに提出となったのは私らしい結末であった。綺麗に製本された卒業論文に

卒論のときに学んだこと

大友 佳代子

私が卒論を書いたのは四七年前。遠い昔のことなので、今思い出すのは、あまりでいい良い学生ではなかったのと、先生方に多々ご迷惑をおかけしたということだけですね。

私は卒論に、ジェイムズ・ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』を選びました。私には荷が重い作家でしたが、三年次の演習で、先生の分かり易い説明で、自分なりに理解したつもりになっていました。しかし、この作家を知れば知るほど、作品を読めば読むほど全く理解できず大きな壁に突き当たってしまいました。さらに悪いことに、その演習の先生は四年次に他大学へ異動なさってしまいました。

この時点で不安を訴え、作家を変えるべきか相談に伺えば良かったのですが、すでにジョイスというので、吉田正俊先生と入江和生先生が私を担当してくださいとに決定していました。

無事に卒論は出来上がりでしたが、質疑応答で何を尋ねられたか全く覚えていない状態。今卒論を読み返してみると、これ卒論なの？と自分でも驚いてしまいました。しかし、書き終えるまで諦めずに助けてくださった先生方には本当に感謝しています。

卒論の時、学んだことが二つあります。一つは、考え抜いた末、壁に突き当たったらそれ以上

休みも終わりに近づいた時、副査であった入江先生からお葉書をいただきました。

「…大学生活最後の夏休みでどんなに遊んでも遊び足りないのに、卒論があつて辛いことお察します。体を壊さないように気を付け、張り切って、闘いの秋に臨んで下さい。」

相談にも行かない、こんな学生の事を気遣ってくださって…と深く反省し、闘いの秋に臨みま

悩まないで、別の選択肢を考えたこと。もう一つは、ダメな学生を見捨てなかつた先生のように、誰かに力を与えられるような人になること。その気持ちを今でも大切にしています。

(一九七四年卒・英文学)

研究ノート

専門は何？

鈴木 国男

私の尊敬する世界的に有名な演劇学者で、イブセンの研究・翻訳で知られる毛利三彌先生は、研究なしで授業することは考えられないと常日頃言われる。これはあたりまえのことなのだが、私などにとっては耳の痛いことでもある。少なくとも文芸学部の専任教員はすべて研究者であるのだが、そうした側面は、普段学生諸君が接する時にはわかりにくいかもしれない。大学のホームページの文芸学部のページには「教員一覧

という欄があり、先生方の著書や論文をはじめとした研究活動が詳しく記載されているので、一度見ると、それぞれの先生の研究者としての顔が見えてくるだろう。

研究者であるからには「専門領域」というものがあるはずだ。「〇〇評論家」ではなく「評論家」(例えば小林秀雄)、「〇〇学者」ではなく「学者」(例えばアリストテレス)こそが本物だと言え

ばその通りかもしれない。ソクラ

全員違うテーマでした。私は、ちょうど男女雇用機会均等法が話題に上ることが多かった当時、「第二の性」という言葉が目をつけたこともあり、シモーヌ・ド・ボワヴォール(G Simone de Beauvoir)の『第二の性』を卒論のテーマに選びました。「人は女に生まれるのではない、女に

「第二の性」に惹かれて

園子 誠訪部

私が卒業論文を書いたのは、もう三〇年以上前のこと。昭和最後の年のこと。文芸学部文学専攻の二年生になる時に、それまで習ってきた英語以外の外国語に触れたいと思い、フランス文学を選びました。

当時のフランス文学コースは、全員で二四人のアットホームな雰囲気でした。個性的でユニークな人が多かった私達の卒業論文は、

哲学専攻の二年生になる時に、それまで習ってきた英語以外の外国語に触れたいと思い、フランス文学を選びました。哲学専攻の二年生になる時に、それまで習ってきた英語以外の外国語に触れたいと思い、フランス文学を選びました。

テス・プラトン・アリストテレスはギリシャ哲学の御三家みたいなものだが、「哲学者」とは本来「知を愛する者」という意味で、アリストテレスは自然科学から政治、芸術に至るまで論じているから演劇の授業にも出てくる。しかし専門分化の著しい今日、まして私程度では到底そんなわけにはいかない。ただ野次馬的、ミーム的アテナを上げていくだけだ。

どんなにケチな研究でも、そんなに時間とお金がかかる。週にたった三日しか出勤せず、たった六コマの授業をするだけでささと帰るなんていい御身分と言われそうだが、いわゆるみなし労働というもので、研究室にある資料は

卒論から研究の道へ

黒須 貴志子

私が、卒論に取り組んだのは、もう五〇年前のことになりました。大学二年の時に受けたロシア文学の授業がきっかけで、ドストエフスキーの負の領域からとらえた文学の世界に魅了されました。そこで卒論の面接では、ボワヴォールの意見に同意し過ぎていて、共感し過ぎていてと指摘されました。ボワヴォールの進歩的な斬新な考えに、当時の私は、反論することなどすっかり忘れてしまっていました。

人生半世紀を過ぎた今なら、もっと冷静に「第二の性」に向き合えると思うので、再び「第二の性」を読んでみたいのです。

(一九八九年卒・仏文学)

で、当時卒論の指導担当であり、また高校の大先輩でもあった倉持三郎先生から指導頂き、のちにノーベル賞作家となったW・ゴールディングの『蠅の王』をテーマに選ぶことに決めました。

教育も不十分で未熟な少年たちが絶海の孤島で繰り広げる、生死をかける殺伐とした世界、やがて理性は欲望や感情に支配され、押しつぶされて、少年たちの世界は破滅に陥っていくという、人間の持つ原罪に警鐘を鳴らすこの作品のテーマは、当時教育界においても重要視されました。昨今、新種の犯罪が多発している状況に鑑みても、科学の進歩や合理性に傾倒することの危険性を、既に、W・G(ゴールディング)は、予見していたことになりました。

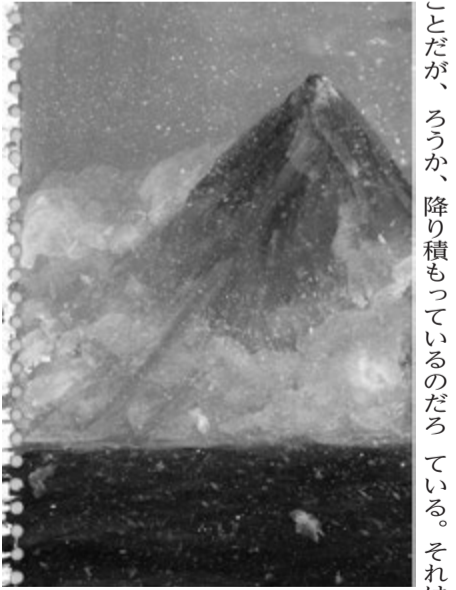
卒業後は大学院に進み、当時盛んだった実存主義文学にのめりこみ、不条理の世界を好んで分析し、修士論文は、S・ベケットを考察しました。私自身、生きることの虚しさを抱え、この世に存在することの意義を文学研究に求めたいのかもかもしれません。自ら思考力を高めるため、哲学、心理学などの専門書を読んで、思うところをノートに書き留めていた覚えがあります。

(一九七三年大学院修了・英文学)

心象点描

富士山と不尽山

遠藤 耕太郎



もう十数年も昔のことだが、終電を逃して、品川プリンスに泊まったことがある。翌朝、遮光カーテンを開けると、真っ白に冠雪した富士山が裾野をおもいっきり引いて、青空の中に輝いていた。圧倒されると同時に、富士山は女神だと直感した。女神かどうかは別として、こういう富士山の光景は、私たちにはおなじみのイメージだ。だが、そのイメージは早くも鎌倉、多くは江戸時代、つまり都が関東に置かれて以降の和歌や絵画によって作られた。明治以来全国に広まったものでは、私たちが生きていて、それが実感をもって迫ってきたりする。

この雪は、降り続けているのだろうか、降り積もっているのだろうか。それは反歌でも同じはずだ。反歌は長歌の一番言いたいことを繰り返すのだから、そうすると、「田子の浦ゆ」の歌は、真つ青な空と海の真ん中に、真つ白く冠雪して輝いている富士山ではなく、神の時代からずっと雪が降り続けている神の山ということになる。だから「万葉集」は「富士」ではなく「不盡」と書く。神の時代から尽きることなく雪が降り続ける山、そしてこれからも永遠に語り継いでいくべき山、それが不盡山なのである。

(教授・日本文学) 挿画・遠藤みなみ

研究室から

日本語日本文学

私は学生時代、香りものを販売するアルバイトをしていました。取扱商品の中でも金木犀の香りが好きで、社割で購入した金木犀のアイテムは今でも使用しています。時には癒しを与えたり懐かしい思い出を想起させたり、「香り」には何やら不思議な力が宿っているように感じます。

今年度、日文研究員の岡田先生が源氏物語に描かれる「香文化」の調査を通じ、研究内容の学内展示や授業内指導をされます。本プロジェクトでは香老舗「松栄堂」の方をお招きし、演習授業にて香体験等が行われますが、こうした実践的な学びは大切なことだと思います。

例えば「源氏物語」の「梅が枝」巻にも薫香における香りの表現があり、文字を追ってみると「こんな感じの香りなのだろう」という想像はできます。しかし、実際はどのような香りなのか、文字を読むだけでは私たちには知る由もありません。紙面上だけでは伝わらない学びは、世の中にたくさんあるのです。

英語英米文学

皆さんも研究テーマに関連のある現物に触れ、見て聴いて嗅いで味わって、五感で学ぶ楽しさをぜひ経験してみてください。

(助手・杉本)

英語・英語圏文学専修、英米文学コース(以下、英文専修・英文コース)では、9月に英語オンラインレッスンを開催します。

昨年度はコロナ感染拡大防止のため、残念ながらコース行事の研究旅行は中止となりました。今年度も宿泊を伴う旅行は中止となりましたが、皆さんが少しでも英語に触れられる機会を作りたい、という英文専修・英文コースの先生方の想いもあり、学内での日帰りオンラインレッスンという形で開催する運びとなりました。

対象となる、英文専修・英文コースの学生には既に募集をかけており、今年度の参加者は決定しました。

フランス語フランス文学

本学では今年度もフランス語圏から3名の留学生(フランスから2名、ベナンから1名)を迎え、授業や研究室主催のイベントを通して、フランス語を学びたい留学生と留学生が交流を深めました。

イベントでは、共立の学生が留学生から自己紹介で使えるフランス語を覚えてもらい、一方で留学生には節句の意味や行事などの日本文化を紹介し、お互いの言語や文化を共有しました。

その中で特に学生が興味を惹かれたのは、ベナン共和国からの特別留学生との交流です。フランス

異動

我々は、無人島でひとり暮らしをしているわけではありませんが、複雑な社会システムのなかで、多くの他者と関わりながら生きています。そう考えると他者との関係性の中で、自他の違いを認め合うことで、互いに足りないものを補い合い、支え合えるようになることこそ、現在社会における「自立」の条件の一つである、という考え方もできるのではないのでしょうか。

(教授・深津謙一郎)

異動

原田敦史 教授 (日本文学)

戸村美里 助手 (劇芸術)

菊地絢子 助手 (造形芸術)

永嶋千春 助手 (文芸メディア)

異動

原田敦史 教授 (日本文学)

戸村美里 助手 (劇芸術)

菊地絢子 助手 (造形芸術)

永嶋千春 助手 (文芸メディア)

受賞卒業生一覧

さくら賞(学部全体)

今城 和香(文芸メディア)

同賞 佳作

市川久美子(仏文学)

大屋 佳苗(文芸教養)

すみれ賞(劇芸術)

駒形 真悠・平野 真実

渡邊 成美

プリマヴェーラ賞(造形芸術)

重村 美沙・榛澤 彩加

古川 歩実(文芸メディア)

文芸賞(文芸教養)

大屋 佳苗・金杉 玲奈

川村 舞佳・ゴードットウラン

四季 桃花・南 典子

森山 智子・山内 香澄

山下恵莉香・横山菜々子

米長 萌

ひばり賞(英文学)

桶川奈都子・西村 密

梅田 祥帆・青山はるか

マリアン又賞(仏文学)

市川久美子・齊藤真規子

新任

橋本嘉代 准教授(文芸メディア)

平野真実 助手(劇芸術)

塚越英恵 助手(造形芸術)

碓塚 朋 助手(文芸メディア)

退職

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形芸術)

永嶋千春 助手(文芸メディア)

異動

原田敦史 教授(日本文学)

戸村美里 助手(劇芸術)

菊地絢子 助手(造形